The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英語語強勢決定のメカニズム : 強勢型と音節の重さの関係
Author(s)	川越, いつえ
Citation	Osaka Literary Review. 1982, 21, p. 14-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25593
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英語語強勢決定のメカニズム

—強勢型と音節の重さの関係—

川　越　いつえ

1.0.　英語の単語の強勢はいかに決定されるかについて Chomsky & Halle (1968) が体系化した分析を示して以来、種々の提案が出されている。その中で近年提出された韻律理論の枠組は，それまでの第一強勢，第二強勢，第三強勢…といった（理論的には）無限数まで続く強勢価に対して，強弱という相対的な関係概念として強勢をとらえる方向を指し示した。

Liberman & Prince ((1977) 以後 LP と略記）にみる韻律理論では語強勢は二つの表示により記述される。韻律構造と [±stress] の両表示である。本論はこの二つの表示が部分的に重複することを問題とし，韻律構造のみで語強勢型を表示する可能性を検討する。

周知の様に英語の語強勢型決定には種々な要因が作用している。動詞か名詞かといった品詞の別もその要因の一つであり，又，接頭辞，接尾辞といった形態素上の情報もその一つである。本稿はこれらの種々の要因の中で，母音がはり母音かゆるみ母音か，子音が母音に後続するかどうかといった音韻上の情報（これらは音節の重さという概念に再編される）をとりあげる。音節の重さと強勢型との関係を考察の中心とするため，資料は二音節以上の名詞[1)]に限定し，派生関係をもつ語彙は扱わない。

1.1.　表 I の諸語はいずれも単一形態素から成る三音節以上の名詞である。欄 (i) はゆるみ母音で終わる語，欄 (ii) はゆるみ母音＋子音で終わる語，欄 (iii) ははり母音＋子音で終わる語を含む。母音の上の ˊ 印は第一強勢の位置を示す。

(1)　表 I

(i)	(ii)	(iii)
vaníllа	pósitron	sélenite
América	aspáragus	staláctite
Cánada	Agamémnon	peróxide
agénda	Jáckendoff	ánecdote
aróma	horízon	níghtingale

LP では表 I の諸語は表 II の様に表示される。（表 I の各欄の代表的なもののみ記す。）

(2)　表 II

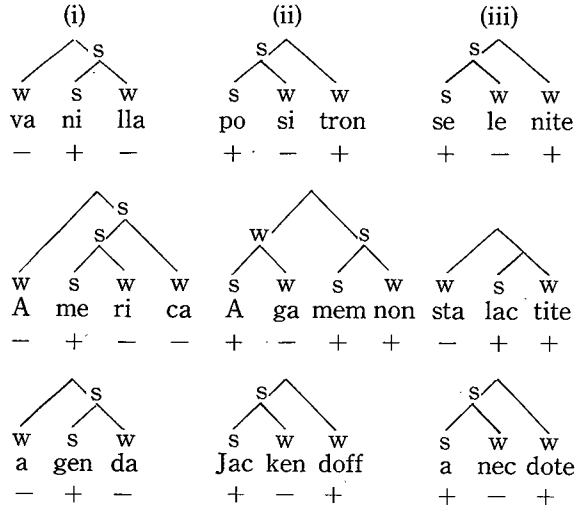

表 II で sw のラベルをもつ語強勢の表示を韻律構造とよぶ。S は強，W は弱を示す。$\widehat{sw}$ は s,w のラベルをもつ二節点が支配する二つの構成素（最少単位を音節とする）が，一つの韻律上の単位（構成素）を成し，その二者の間に強弱の韻律上の関係があることを示す。表 II (i) の agenda を例にとると，第二，第三音節（-genda）が $\widehat{sw}$ の韻律関係をもち，一つの構成素を成す。この二音節と第一音節との間にも $\widehat{sw}$ が定義され，全体で一構成素（語という統語上の単位に等しい）となる。以上で分かる様に韻律構造は強弱の関係をもつ，binary な階層状を成す。

表Ｉでは語強勢は母音に付された印(′)で示された。この印はその母音が他の母音より際立ちをもつことを示していた。一方，表IIにみる韻律構造では全ての音節が韻律上の関係を定義され，韻律構造内に組み込まれる。語強勢は直線状に並ぶ母音と子音のうちのあるものが，他のものより際立ちをもつという表Ｉの形式ではなく，全ての音節を組み込んだ全体的な型として認識されることになる。

表IIには韻律構造の他に＋，－による表示がある。これは各々[+stress], [−stress] という母音の素性を示す。この表示の果たす役割はまず韻律上Ｓとなる音節を決定することであり，もう一つはその母音の弱化の有無を示すことである。[+stress] はその母音が full quality をもつことを示し，[−stress] はその母音が表層で〔ə〕に弱化することを示す。LPの枠組では [±stress] の表示をもとにして，韻律構造が決定され，又，この表示により，母音弱化の有無が示されている。

1.2. ある母音の属する音節が韻律上Ｓの時には，その母音が弱化することはない。そこで，音節を支配するＳと [+stress] は必ず一対一の対応をする。一方，ある音節が韻律上Wの時にはその音節に属する母音は弱化する時としない時がある。そこで音節を支配するWは＋，－いずれの表示とも対応する。表IIの語強勢表示をみると語末音節以外では，ある音節が韻律上Ｓであれば母音は [+stress], Wであれば [−stress] である。表IIの限定された事例内ではあるが，このことは母音の弱化の有無が(i)Wに支配されているかどうか，(ii) 語内のどの音節内にあるか，によって決定されている可能性を示唆している様に思われる。

この考えに立つと，LP の主張とは逆に，母音の [±stress] の表示は韻律構造の情報から決定される。そして韻律構造は母音の [±stress] の価とは独立した原則で決定されることになる。そこで次の二点が本稿の検討対象となる。(1)母音のもつ [±stress] を手がかりとしないで韻律構造を決定することは可能か。(2)韻律上Wをもつ音節に支配された母音が弱化するかど

うかをいかに決定するか。この二点は上述の[±stress]表示のもつ二つの役割に対応する。即ち，本稿はLPが[±stress]として一括して表示したものをその機能から二つに分けて考え，各々，独立した原則で決定される相互に自立した，音節の特質であることを示そうとするものである。

2.1. 本節は上述の課題(2)をとり扱う。ある音節に韻律上弱(W)の関係が定義された場合，その音節に含まれる母音は弱化してあいまい母音([ə])になる場合と，弱化せずその母音の full quality をもち続ける場合とが観察される。これは次の様な母音の弱化規則を音韻部門に設定することで記述することができる。

(3)　母音弱化規則(a)（後に修正される）

$$V \rightarrow [ə] \ / \ \underset{W}{\underline{\quad\quad}}$$

規則(a)はある母音（Vで示す）がWに支配された環境にあらわれる時，[ə]になることを示している。この規則がWで支配される全ての母音に適用されるものでないことは上述の通りである。そこで以下に規則(a)の適用条件を語頭，語中，語末に環境を分けて検討する。

2.2.　語内の第一母音がWを韻律構造で付与される場合は，次の三つに分類しうる。便宜上，第1強勢を ˊ で記す。

(4)　表III

(i)	(ii)		(iii)
agénda	a) aspáragus	b) Victróla	Miámi
aróma	mosqúito	bandána	myópia
vanílla	astrónomy	Kentúcky	Odéssa
horízon		Horténsia	diámeter
Mononghéla			

欄(i)はゆるみ母音(V̆で示す）の後に子音一つ以下(C_0^1で示す）が続く場合である。この条件の時，母音は必ず弱化する。欄(iii)の第一母音は，は

り母音（$\bar{V}$で示す）である。この時，母音は弱化しない。欄(ii)の第一母音はゆるみ母音で子音二つ以上が後続する（$\check{V}C_2$で示す）。この条件では弱化を示す場合(a)と，示さない場合(b)がある。

欄(ii)の(a)と(b)は音連鎖を母音と子音から成る分節連鎖としてとらえる立場では区別しえない。$\check{V}C_2$という同一条件下で，ある母音は偶然弱化し，ある母音は偶然弱化しないということになる。即ち，$\check{V}C_2$の環境にある母音の弱化については一般的な予知はできず，各単語毎に弱化の有無を記す必要があることになる。

ところが今，音連鎖を音節に区切られたものと考え，表Ⅲの諸語に音節境界（・で示す）を導入してみる。[2] 表Ⅳである。

(5) 表Ⅳ

(i)	(ii)		(iii)
a.gén.da	a) a.spá.ra.gus	b) Vic.tró.la	Mi.á.mi
a.ró.ma	mo.squí.to	ban.dá.na	my.ó.pi.a
va.ní.lla	a.stró.no.my	Ken.túc.ky	O.dé.ssa.
ho.rí.zon		Hor.tén.si.a	di.á.me.ter
Mo.non.ga.hé.la			

弱化を示す(ii-a)では，音節境界は母音の直後にくる。一方，弱化しない(ii-b)の諸語では母音の後に子音がきて第一音節が区切られる。弱化を示す欄(i)の諸語でも母音の直後で音節が区切られている。(ii-a)と同一条件である。以上から音節がゆるみ母音で終わる時に弱化がおこり，それ以外の場合には弱化しないと考えられる。この観察から弱化規則(a)は語頭では次の様に適用を制限される。

(6) 母音弱化規則(b)

$$\check{V} \longrightarrow [\text{ə}] \ / \ \#X.\underbrace{Co__C_0^0}_{W}. \qquad \text{条件：} X = \emptyset$$

$\check{V}$はゆるみ母音を，・は音節境界を，C_0^0は子音が後続しないことを，$X = \emptyset$は語頭であることを示す。

2.3.　母音弱化規則(b)に記された条件は語中でも有効であろうか。表Vは語中で韻律上Wに支配される母音を，その含まれる音節の種類に従って分類したものである。以下，表中 (i) 等の欄は，表Ⅳの各欄の分類に準ずる。

(7)　表V

(i)	(ii-a)	(ii-b)	
dý.na.mite	pé.di.gree	① Tim.buk.tóo	②Jác.ken.doff
pá.li.node	an.gos.tú.ra	chim.pan.zée	á.nec.dote
té.llu.ride		Ti.con.de.ró.ga	nígh.tin.gale
Ca.ta.ma.rán			á.symp.tote

音節がゆるみ母音で終わる(i)と (ii-a) では弱化規則(b)の予測する通り弱化がみられる。一方，(ii-b) のゆるみ母音の後に子音が音節内で後続する場合には，(ii-b-①) にみる様に母音が弱化しない場合と，(ii-b-②) にみる様に弱化する場合とがある。弱化しない①の事例は少ない。そこで語中ではゆるみ母音は子音が後続する場合も，しない場合も弱化するのが一般であると考え，語中での弱化の条件を(8)に示す。

(8)母音弱化規則(c)

$$\check{V} \rightarrow [\text{ə}] \ / \ \#X.\underbrace{Co__Y}_{W}.Z\ \#$$

条件：X,Z≠Øならば Y＝Co

X,Z≠Øは当該音節の前後に音節連鎖が存在することを示し，CoはO以上の子音が音節内で後続することを示す。

弱化規則(c)はその条件から表Vの全ての語に適用され，下線部の母音を弱化させる。(ii-b-①) の諸語は弱化を示さないが，それがどの様な理由によるものかを指摘することは現在できない。そこで (ii-b-①) の諸語は語彙目録内で〔規則(c)は不適〕という規則素性を付与されていると考える。これは (ii-b-①) の諸語の下線部の母音が弱化しないことについて，それは各語彙項目のもつ偶然的な特性であり，一般化しえないものであることを示す。

表Vの欄 (iii)は存在しない。これは単一形態素の語では語中にあるはり母音は全て韻律上のSを付与されるためと考えられる。

2.4. 語末でWに支配される音節は表Ⅵにみる様に分布する。語末では全ての子音がその直前の母音と同一音節に属すると考えられるため，表Ⅳ，Ⅴで (ii-a) とされた区分はない。

(9) 表Ⅵ

(i)	(ii-b)		(iii)
a.gén.da	①mác.kin.tosh	②as.bé.stos	cá.val.cade
A.mé.ri.ca	sý.lla.bub	a.ná.ly.sis	á.nec.dote
va.ní.lla	Jác.ken.doff	ár.se.nal	már.tin.gale
O.dé.ssa	ál.co.hol	a.mál.gam	stá.lac.tite
	ám.per.sand	phló.gi.ston	sé.le.nite
	dá.ven.port	é.le.phant	

語末でも語中同様，欄 (i) のゆるみ母音で終わる音節は弱化を示し，欄 (iii) のはり母音は弱化を示さない。だが，欄 (ii) では弱化を示さぬ①の諸語と弱化を示す②の諸語が併存する。Ross (1972 pp. 246-54) は①②にみる弱化の違いが語末の子音群から予知できることを示した。Rossの観察では名詞が自鳴音一つ ($[+\ son]_1^1$で示す) か，歯音一つ ($[^{+cor}_{+ant}]_1^1$で示す) で終わるか，又は次の七つの子音群 (st, rt, nt, rd, rn, ns, ts) のいずれかで終わる時（以上の三種の子音群をCbで表わす），その直前のゆるみ母音は弱化する可能性をもつ。だがCb以外の子音で終わる時は弱化しない。そこで次の弱化規則があると思われる。

(10)母音弱化規則(d)

$$\check{V} \rightarrow [\text{ə}] \ / \ \# \ X.\ \underbrace{Co\ __\ Y}_{W}.\ Z\#$$

条件：Z＝∅ならば Y＝(Cb)

(Cb)は子音が同一音節内で母音に後続しないか，又はCbに属する子音群が，後続することを示す。Z＝∅は語末音節を示す。

弱化規則(d)は (ii-b-②) の諸語には適用するが，(ii-b-①) の諸語にはその制限のために適用しない。(ii-b-①)の諸語中，alcoholの様に規則(d)の条件を充たしているにもかかわらず弱化しないものがある。これらの諸語は語彙項目に〔規則(d)不適〕の規則素性をもつと考えられる。

2.5.　本節は韻律上弱の関係をもつ音節内にある母音がどの場合に弱化し，どの場合に full quality をもつかを検討した。はり母音は語内のどの位置にあっても弱化することはない。一方，ゆるみ母音はその母音の含まれる音節が語頭にあるか，語中か，語末かによって弱化の条件が変化する。語頭では子音が同一音節内で母音に後続しない場合のみ弱化する（規則(b)）。語末では子音が後続しないか，又はCbとよぶ特定の子音群が後続する場合のみ弱化する（規則(d)）。語中では子音が後続する場合も後続しない場合も弱化がおこる（規則(c)）。

規則(b)(c)(d)を折りたたんで一つの式型にまとめると次の様になる。

(11)母音弱化規則(e)（最終形）

$$\check{V} \rightarrow [\text{ə}] \ / \ \#\ X.\ \underset{\underset{W}{|}}{\underline{Co\ __\ Y.}}\ Z\#$$

条件：X＝∅ならばY＝∅
Z＝∅ならばY＝(Cb)

x, zは音節連続を示す。

規則(e)は母音弱化の条件として，まず，ゆるみ母音で韻律上弱の音節内にあることを挙げる。次に，母音の属する音節の語内での位置（x, z により示す）により，弱化条件(Y)が異なることを示している。即ち，語頭では弱化への制限が最も厳しく，語末がこれに続き，語中では最も緩いといえる。

3.1.　第二節でWに支配された音節内の母音が弱化するかどうか(即ち，LP の表記によれば [±stress] がいずれの価をとるか)の条件を定式化した。ここで再び第一節で示した表IIを検討すると，Wの支配する音節内の母音のもつ [±stress] の価は全て弱化規則(e)で記述しうることが分る。即ち，表IIの [±stress] の表示は弱化規則(e)により全て予知しうる。では，弱化規則を条件づけるSWの関係はいかに決定されるのか，それが本節の検討対象となる。

従来の諸研究から語強勢付与は語末の音節が出発点となって分析されることが分かっている。今，表IIをみると語末音節は全て韻律上のWの位置を占めている。そこで韻律構造を決定する諸原則の中には，「語末の音節

を支配する節点Nを韻律構造に設定し，これにWを付与せよ」といったものが含まれていると考えられる。以上のことを(12)に示す。

(12)　N
　　|
　　X_1　X_2　#　　条件：$X_2=\emptyset$ならばNはW

#は語境界を，Xは1音節を　Nは韻律構造内の節点を示す。

韻律上のSWは二者間の関係概念である。そこでWを与えられた節点の対の節点は必ずSを付与されることになる。しかもこの対の節点はWSではなくSWの順序関係をもつことが韻律構造の原理上定義されている。(LP (1977, p. 266))。また対の節点の存在しない場合には韻律構造は取り消される。以上は(13)の様に示される。

(13)　(a)　$\widehat{N_1\ N_2}$
　　|　|
　　X　X　　のとき，N_2がWならばN_1はS.

　　(b)　$*\widehat{N\ N}$
　　|　|
　　X_1 X_2　但しX_1又はX_2が$\emptyset$の場合とする。

3.2.　表IIの語群は語末の音節の種類に従って(i) (ii) (iii)に分類されていた。この各欄は語末から二番目の音節の種類で更に，(a)(b)(c)に分類することができる。(a)はゆるみ母音で終わる音節，(b)はゆるみ母音＋子音，(c)ははり母音を含む音節を語末から二番目にもつものとする。今，(12)で付与された語末のWの対となるSを表IIに探すと，語末から二番目の音節がゆるみ母音で終わる場合((a)の場合)には，その音節のみでSとなることは少ない。一方，この位置に　はり母音，又は，ゆるみ母音＋子音の音節がくる場合((b)(c)の場合)には，その音節にSが付されるか，又は，更にその左の音節との対にSが付される。

以上にみた音節の種類と韻律構造の関係をまとめたものが表VIIである。この表では欄(a)(b)(c)は更にSの位置により分類されている。(1)は語末から二番目の音節にSのくる場合，(2)は語末から二番目と三番目の音節の対にSのくる場合である。音節の種類は次の記号で示されている。σはゆるみ

母音で終わる音節，Σはゆるみ母音＋子音で終わる音節，Σ'ははり母音を含む音節を示す。Xは種類を問わず，一音節を示すものとする。

(14)　表Ⅶ

		(i) 語末 σ	(ii) 語末 Σ	(iii) 語末 Σ'
語末から二番目 σ	(a-1)	+M X s w X σ σ ex. va ni lla	+M s w X σ Σ ex. lieu te nant	* s w X σ Σ'
	(a-2)	s w X σ σ ex. Ca na da	s w X σ Σ ex. po si tron	s w X σ Σ' ex. se le nite
語末から二番目Σ	(b-1)	s w X Σ σ ex. a gen da	s w X X Σ Σ ex. A gamem non	s w X Σ Σ' ex. stalac tite
	(b-2)	* s w X Σ σ	s w X Σ Σ ex. Jackendoff	s w X Σ Σ' ex. a nec dote
語末から二番目Σ'	(c-1)	s w X Σ σ ex. a ro ma	s w X Σ' Σ ex. ho ri zon	s w X Σ' Σ' ex.pe cca vi
	(c-2)	* s w X Σ' σ	* s w X Σ' Σ	* s w X Σ' Σ'

3. 3.　表Ⅶは語末をWとする三音節以上の名詞の韻律構造に於て，語末三音節のとる部分の可能性を全てあげたものといえる。このうち英語の強勢型として存在しないと思われるものに＊を付した。(c-2)は (i) (ii) (iii) いずれにおいても＊をもつ。これらを (c-1) と比べると，語末から二番目の位置のΣ' は必ずSを付与されることが分かる。

次に (a-1) をみる。(iii) 以外に＊はないが，(i) も (ii) も英語では数少ない強勢型で例外的な型とされる(＋Mで示す)。(a-2)の型が方が好まれると

いえる。そこで語末から二番目の音節が σ の時には，更にその左の音節との対にSが付与されることが分かる。

語末から二番目に Σ のくる(b)では二つの傾向が併存する。Σ にSの付与される (b-1) と，更にその左の音節との対にSの付与される (b-2) である。この (b-2) の場合，語末が σ のものは英語の強勢型にはあまりないと思われる。即ち，＊ágenda といった強勢型は (c-2) の＊Víctrola＊Óctober 同様好まれないといえる。

以上の観察をまとめると(15)となる。

(15) $X_1\ X_2\ X_3$ ＃の連鎖がある時　(a) X_2 が σ ならば　$\widehat{X_1\ X_2}\ X_3$

(b) X_2 が Σ ならば　$\widehat{X_2\ X_3}$ 又は　$\widehat{\widehat{X_1\ X_2}\ X_3}$

(c) X_2 が Σ' ならば　$\widehat{X_2\ X_3}$

(c-2) の強勢型が英語で好まれないのは (15-c) の原則に違反するためであり，(a-1) の型が例外であるのは (15-a) の原則に違反するためである。

表Ⅶ (b-2) の (i) の強勢型は(15)のいずれの原則に違反するのだろうか。(15-b) は $\widehat{X_2\ X_3}$ も $\widehat{\widehat{X_1\ X_2}\ X_3}$ も可能な強勢型としているので (b-2) の (i) も英語の強勢型として可能なことになる。だが，この型が (c-2) の (i) 同様，好まれないのは上にみた通りである。そこで (b-2) の (i) を (ii) (iii) と比べると語末の音節とその左の音節との関係に違いのあることが分かる。この二音節のみ再録すると次の様である。

(16) 表Ⅶ (b-2) (i) Σ σ ＃ (ii) Σ Σ ＃ (iii) Σ Σ' ＃

ここで(15)にまとめられた観察を再見すると，三種の音節の間にはSをひきよせる力に違いのあることが分かる。即ち，語末から二番目の位置で Σ' は必ずSをひきよせるのに対し，σ はその左の音節と対にならないとSをひきよせられない。Σ はこの両者の中間にあり，単独でSをひきよせる時もあり，又，左の音節と対になってSをひきよせることもある。今Sを単独でとりうる力を強勢における音節の重さとよぶとすると，この三種の音節の間には次の関係が成り立つ。

(17) Σ' ＞Σ＞o　（X_1＞X_2 で X_1 は X_2 より重いとする）

(17)の関係をもとに，(16)に記された (b-2) の最終二音節の関係をみる。すると英語で好まれない強勢型とされた(i) の場合のみ，語末から二番目の音節が語末の音節より，より重いことが分かる。そこで英語には (15-b) の原則の適用に関して次の制限があると考えられる。

(18)　$X_1 X_2 X_3$ # に於て　$X_2 > X_3$ ならば　$\widehat{X_2 X_3}$ で＊$\widehat{\widehat{X_1 X_2} X_3}$

(15-b) では $X_2 > X_3$ は語末が σ の時のみ成立する。この時(18)の制限は $\widehat{X_2 X_3}$ と正しい予知をする。又，語末が Σ, Σ' の時は $X_2 > X_3$ が成立せず，(18)の制限は何の予知もしない。そこで (15-b) により，$\widehat{X_2 X_3}$，$\widehat{X_1 \widehat{X_2 X_3}}$ のいずれも可能であるとされる。

3.4. 以上では(18)は (15-b) の適用を制限するものととらえられてきた。だが，今，(18)に次の条件を加えると (15-b) は不要となる。

(19)　$X_1 X_2 X_3$ # に於て　$X_2 \leqq X_3$ ならば　$\widehat{X_1 \widehat{X_2 X_3}}$ 又は　$\widehat{X_2 X_3}$

(15)の原則が語末から二番目の音節のみに着目し，それによって強勢型が決定されると主張しているのに対し，(18＋19) の原則は，語末二音節の重さ関係によって強勢型が決定されると主張する。(15)の原則は，(15-b) でその適用について(18)の制約を必要とした。このことは(15)の原則そのものが，(18＋19) の原理で支配されている可能性を示唆するものと思われる。以下に (15-a), (15-c) の場合を再検討する。

(15-a) の X_2 が σ の場合とは，$X_2 \leqq X_3$ が成立し，(19)の原則が適用する場合である。(19)は表Ⅶ (a-1), (a-2) の両方を等しく英語らしい型と予知してしまう。表Ⅶを更に検討すると，(a-1-i) 型は (a-1-ii) 型より英語ではよく見られることが分かる (例，banána, Kentúcky)。そこで(19)を(20)に修正する。

(20)　$X_1 X_2 X_3$ # に於て　$X_2 = X_3$ ならば　$\widehat{\widehat{X_1 X_2} X_3}$ 又は　$\widehat{X_2 X_3}$

$X_2 < X_3$ ならば　$\widehat{X_1 \widehat{X_2 X_3}}$

だが，(20) は語末が Σ' の 表Ⅶ (b-iii) の 場合に，誤まった 予測を してしまう。このとり扱いでは 語末が Σ' の時，$X_2 < X_3$ となり ánecdote 型の $\widehat{\widehat{X_1 X_2} X_3}$ が常に予知され，staláctite 型は英語の強勢型らしくないことに

なる。(b-1) の (ii) の Agamémnon 型を英語の強勢型として好まれるものとし，一方で (b-1) の (iii) staláctite を好まれない型とすることは平行性を欠くとり扱いだと思われる。そこで語末がΣ'の場合に限りΣ'はΣと同じ重さだと考えるとすればどうであろうか。即ち，$\Sigma' \rightarrow \Sigma$ /— # という規則が存在すると考える。すると表Ⅶ (b) - (iii) の事例も全て $X_2 = X_3$ となり，$\widehat{X_2 X_3}$ と $\widehat{\widehat{X_1 X_2} X_3}$ の両方の強勢型が可能なことになり事実に適合する。

語末に限り$\Sigma' \rightarrow \Sigma$とするという条件は，一見 ad hoc にみえるが，(15-c) の場合にも有要である。(15-c) では語末がΣ'の時を除き，$X_2 > X_3$ が成立し，⑳ が $\widehat{X_2 X_3}$ を正しく予測する。語末で$\Sigma' \rightarrow \Sigma$とする条件を導入すると，(15-c-iii) の場合のみ，⑱の例外と考える必要がなくなる。

以上から，語末音節に⑫によりWが付されると，その対となる構成素は次の原則で構築されることとなる。

㉑ $X_1 X_2 X_3$ # に於いて (a) $X_2 > X_3$ ならば $\widehat{X_2 X_3}$

(b) $X_2 = X_3$ ならば (i) $\widehat{\widehat{X_1 X_2} X_3}$

(ii) $\widehat{X_2 X_3}$

(c) $X_2 < X_3$ ならば，$\widehat{\widehat{X_1 X_2} X_3}$

但し語末では$\Sigma' \rightarrow \Sigma$が成立する。

表Ⅶの (a-1-i) の諸語は原則 (19-b) の (i) について不適の素性が語彙目録内で与えられ (ii) の型となる。(a-1-ii, iii), (b-2-i), (c-2) の強勢型は原則㉑に合わないため英語らしくないと判断されることになる。このことは原則㉑の導入により，表Ⅶにみた音節の組合せから成る可能な強勢型が三種に区別しうることを意味する。即ち，原則㉑に符合する強勢型（英語らしいとされる型），原則㉑の一部について各語彙項目で不適の指定がされている強勢型（英語としては少数派の型）と原則㉑に違反する強勢型（英語らしくない型）である。第二の型は vanílla に代表され，第三の型は存在しないが＊Víctrola に代表される。

表Ⅶ (b-1) (b-2) の (ii) (iii) の場合は原則㉑の(b)にあたる。(i) と (ii) の二つの強勢型が可能である。では，そのいずれになるかはいかに決定される

のか。これは本論の検討の範囲をこえるが，接尾辞の種類がこの決定に影響をもつと考えられる。(Fudge (1975, pp. 286-90), Kingdon (1958) 参照) 又，Agamémnon 等では，本論の強勢付与は第一強勢より左の強勢型については何の原則も呈示していない。語末からの場合と同一原則がくり返されるのではないかと考えられるが，それは本稿の検討の範囲外とする。

4. 本稿では LP の強勢型表示の枠組から [±stress] の表示をとりのぞき，韻律構造を音節連鎖に直接付与する方法が検討された。そこでは語末の二音節間の重さの関係が，韻律構造を決める手がかりとなることが示された。一方，[±stress] が LP の枠組で示していたもう一つの働き，即ち，母音の弱化の有無については，それが音節の語中での位置と重さから決定されることが示された。

本稿の扱った事例は極めて限定されたものであり，本稿で言及した諸問題の他に派生形間の関係の問題など，残された課題は多い。これらの諸問題ととりくみつつ本稿の結論を検証してゆくことが今後の課題である。

References

Chomsky, Noam and Morris Halle. (1968). *The Sound Pattern of English.* New York : Harper & Row.

Fudge, Eric C. (1975). "English Word Stress : An Examination of Some Basic Assumptions," in D. L. Goyvaerts and G. K. Pullum, eds., *Essays on the Sound Pattern of English.* Ghent : E. Story-Scientia.

Kahn, Daniel. (1980). *Syllable-Based Generalizations in English Phonology.* New York : Garland Publishing, Inc. (Ph. D. Diss., M. I. T., 1976).

Kingdon, R. P. (1958). *The Groundwork of English Stress.* London : Longmans.

Kiparsky, Paul. (1979). "Metrical Structure Assignment is Cyclic," *Linguistic Inquiry,* 10.

Liberman, Mark and Alan Prince. (1977). "On Stress and Linguistic Rhythm," *Linguistic Inquiry,* 8.

Ross, John R. (1972). "A Reanalysis of English Word Stress (Part 1),"

in M. K. Brame, ed., *Contributions to Generative Phonology.* Austin: University of Texas Press.

注

1) 二音節語の強勢型は音節の関係では決定されないため本稿の資料とはしない。但し，母音の弱化においては対を成す二音節間の重さの関係が影響を与えると思われる。これについては Ross (1972, pp. 255-6) 参照。
2) 本稿の用いる音節区分法は Kahn (1980, pp. 23-4) に基づく。英語で許される音節開始結合と音節終結結合は，ほぼ英語で許される語頭と語末の結合に対応すると考え，語中では強勢付与以前には，音節開始結合の方が優先的に音節内に組み込まれるとする。本稿では便宜上，語彙表示を綴り字で記す。このため音節区分に不明確な点があるが，これは本稿の論旨に影響を与えるものではない。